

第 1 話

はじめての外 来

内覧会が開催された翌週月曜の朝 9 時過ぎ、タカ子はクリニックの待合で朋子とともに診察が始まるのを待っていた。この日はクリニックの開院日で、タカ子たちが内覧会のときに見かけた老夫婦も待合で話をしながら待っていた。老夫婦が先に診察室に呼ばれ、10 分程度して診察が終わって部屋を出てきた。

「山田さん、お待たせしました。診察室へどうぞ。」

しばらくして院長の柘植がタカ子と朋子を診察室のなかに招き入れた。

「こんにちは、先日は内覧会に来ていただきありがとうございます。症状は疲れやすさとのことですね。確かタカ子さんは最近、犬の散歩で疲れやすくなったと仰っていましたね。」

柘植は問診票に目をやった後、顔を上げてタカ子を見つめてこう切り出した。問診票には症状の詳細を書く欄があり、タカ子は“半年前からの疲れやすさ”と記載していた。また、過去の既往、現在の内服、アレルギー歴などを記載する欄には待合で待っているときにすべて埋めておいた。

「そうなんです、先生に息切れの話を伺ってから、毎日日課にしている犬の散歩で感じる疲れやすさが何か心臓の重大な病気の症状じゃないかと心配になってきたんです。」

「なるほど。そのような自覚は半年前からあるのですね？」

「そうです。家を出てすぐのところに坂道があるのですが、半年前からなぜか上っていくのが億劫になってきたんです。だから散歩ルートも変えようかと考えていたところでした。あと、自分では元気だと

思っていたのですが、孫と一緒に散歩に行ったときに呼吸が苦しそうだと言われたのは少しショックでした。でも、これらは年齢のせいだと思いうようにしていたのであまり不思議には思っていませんでした。」

タカ子は恥ずかしそうに答えた。

「それ以外にも疲れやすさを感じることはありますか？」

「先日の内覧会で、先生の講演に間に合うように急いで階段を上ったときにしんどくなりました。」

タカ子がこう話した後に、朋子も付け加えるように気になっていたことを柘植に話した。

「あと、母と夕食を一緒につくっているときに、肩で息をしていたことがありました。息切れなんだろうと思うのですが、今までなかったことだったので気になりました。」

柘植はさらに続けた。

「動いたときの症状が徐々に悪くなっている感じはありますか？」

「ここ1か月くらいは、急に動きだしたときに特に疲れやすさが強いような気がします。」

「なるほど、そうでしたか。」

柘植はタカ子の返事から何か思いあたったようであり、このやり取りをしたあとは今までの既往や内服薬の有無などその他の一般的な問診内容を確認して身体診察に入った。血圧について、以前は健康診断などで測ると100/60 mmHgくらいであったが、本日クリニックで測ってみると145/90 mmHgと高くなっているようであった。続いて胸部の診察となった。深呼吸をして肺の音を確認して問題はないようであったが、心臓の聴診で柘植の表情が変わったように思えた。

「心臓に雑音があります。今まで指摘されたことはありませんか？」

診察をしていた柘植は聴診していた手をいったん止めてタカ子に確認した。タカ子は初めてこのような指摘をされたため、驚いたような

顔で振り返って朋子と顔を見合わせた。

「数年前に健康診断で呼吸の音は聞いてもらっていて、そのときは指摘されなかったのですが…。でも、心臓の音は聞いてもらえていないかもしれません。どのような問題なのでしょうか？」

「心臓弁膜症の可能性あります。」

柘植は静かに“心臓弁膜症”という言葉を変えた。

「心臓の雑音にはいろいろあってももちろん正常な場合もあるのですが、とくに動いたときの疲れやすさが増えていて心雑音が聞こえる場合は心臓弁膜症を考えなければいけません。」

「心臓弁膜症って最近テレビのCMで聞いたことがあるのですが、自分ではまったく思ってもみませんでした。」

タカ子は心臓弁膜症という言葉を知ってはいたが、自分がそのような病気を疑われていることに驚いた。また、心臓弁膜症という病気について何も知らなかったため、見えない敵に遭遇したようで大きな不安を感じた。それに対して柘植はタカ子と朋子に、用意してあった説明用の資料を使って、心臓の構造や心臓弁膜症はどのようなものかについて説明した。そして以下のように続けた。

「いずれにしてもタカ子さんの疲れやすさについて、心臓弁膜症を含めた原因精査を進めていく必要があります。循環器疾患の検査には一般的なものとして、血液検査、心電図、胸部レントゲン、心エコー検査の4つがあります。とくに心臓弁膜症を診断するためには心エコー検査は必須となりますが、その他の検査も診断や重症度を確認するために重要なものです。これからこれらの検査を進めていきましょう。」

タカ子と朋子は柘植の説明を十分に理解はしたものの、不安な面持ちで診察室をいったん後にした。やはり心臓弁膜症という具体的な病名が気になったからだ。

「お母さん、心臓弁膜症の可能性についてまったく考えなかったけれども、この際しっかりと検査をしようね。」


タカ子は朋子の言葉に強く頷いて待合室で検査を待った。

(つづきは 48 ページ「第 2 話」)

1 心臓のしくみとはたらき

- ✓ 心臓（心室）は、酸素を多く含む血液を全身に送るポンプの役割をしています。
- ✓ 血液の流れをつくるため、左右の心室の入口と出口には心臓弁がついています。
- ✓ 心臓は休むことなく1日に10万回も動いています。

心臓のしくみ

われわれの心臓は、胸のほぼ中央にあって、こぶし大ほどの筋肉でできた臓器です。心臓の筋肉（心筋）が収縮と弛緩を繰り返すことによって血液を全身に送り出しており、これによって心臓は生体ポンプとしての役割を担っています。心臓は4つの部屋に分かれており、左心室は肺から戻ってきた酸素の多い血液（動脈血）を全身に送るための、右心室は全身から戻ってきた酸素の少ない血液（静脈血）を肺に送るためのポンプ機能を持っています。そして、左心室と右心室には入口（流入路）と出口（流出路）にそれぞれ逆流を防止するための心臓弁がついています（ 1）。左心室の流入路には「僧帽弁」、流出路には「大動脈弁」、右心室の流入路には「三尖弁」、流出路には「肺動脈弁」と呼ばれる心臓弁があります。僧帽弁は2葉弁（2枚の弁葉から構成される心臓弁）、その他の弁は3葉弁（3枚の弁葉から構成される心臓弁）と表現されることがありますが、実際の心臓弁はそれぞれ違う構造をしており、異なるしくみで働いています。これらの心臓弁が心臓の拍動に合わせて協調して動くことによって、全身の血液の流れ（血流）を一方方向に保つことができます。例えば左心室では、